

京攝も同じおもむきにて、一目千軒に、大夫天神みづから三線ひかざる故、牽頭たひと女郎ぢやうぢやうを呼なり、又藝子といふもの外にあり、むかしはなかりしに、寶曆元未の年にはじまるとあり、また落標みちしには、たいこ女郎といへるものは、揚屋茶屋へよばれ、座敷の興を催すためのものなり、琴三味線胡弓はいふもさらなり、むかしは女舞などつとめしものなり、享保年中より、藝子といへるもの出来たりともあれば、江戸よりははるかにはやし、これにならひて、吉原にてはじめしもゑるべからず、江戸にもをどり子はふるくよりありたれど、女藝者は明和のころよりありときけり、それともとはふり袖など著て、今よりはひとときはすぐれて品もよかりしよし、さて女藝者は、古の白拍子のなごりなどの如く、おもふ人もあれどさにあらず、もと遊女よりいで、躍子の一變せしものなり、因に云、吉原にてはむかしより二挺鼓に大鼓を兼ること、女藝者の技にて今に絶ず、さて京大坂にても藝子の唄に、大鼓などの囃子を入れる、こともあれど、その地もとより座唄をうたふ者なく、いはゆる上方唄のみなり、されば江戸の如く下座したまたは下したかの鳴物に定りたる手なし、かの上方唄には、謠曲の詞をとりたるが多かれば、猿樂の大鼓の手をならひおぼえて、その間を合するといへり、その外大阪の坂町、島の内をはじめ、諸國の舟つきの湊などは、豆藏のはやしのごとく、松島おし、川崎おんどなどうたふまゝに、客も遊女もおのが宏、拍子をとり、大鼓をうち入る、ことならはしなり、吉原にても、このごろはよしこのぶしど、いつなどいふ小唄に、大鼓あはすことは、全席上のにぎやかならんためのわざとはおもはるれど、鄙の手ぶりにならふことは、この里にはせでもありなにかし。

〔蜘蛛の糸巻追加〕町藝者

天明の頃は世の中賑はしく、武家にては少し酒盛めく折は、町藝者として、酌取女を招くは、何れの家にもある事なり、されど此酌取女も質素の風ありて、鬘結に紅絹の切をよしの紙に包みて用